
 学 会 記 事

第 8 回新潟胆膵研究会

日 時 平成 19 年 9 月 29 日 (土)
午後 2 時～6 時 45 分
会 場 万代シルバーホテル
5 階 万代の間

Session I 『胆道癌』

 1 胆嚢上皮内癌を伴った黄色肉芽腫性胆嚢炎の
1 例

上野 亜矢・佐藤 秀一・摺木 陽久
阿部 要一*・山田 明*

木戸病院内科
同 外科*

症例は 80 歳，女性。意識消失にて来院。TIA と診断されたがスクリーニングの腹部 CT にて胆石および胆嚢の全周性の壁肥厚を認めた。腹部血管造影検査では胆嚢全体に淡い造影効果がみられた。胆嚢癌を疑い開腹したが，術中所見では胆嚢癌は否定的であり，術中組織診にても胆嚢壁，胆嚢管断端に悪性像は認められず，胆嚢摘出術を行なった。しかし切除胆嚢の病理組織診の結果，胆嚢壁は，泡沫細胞，多核巨細胞を含んだ炎症細胞浸潤を伴う黄色肉芽腫性炎症および線維組織の増生により著明に肥厚しており，一切片に上皮内にとどまる adenocarcinoma (tub1) を二箇所認められた。黄色肉芽腫性胆嚢炎には胆嚢癌の合併率が高い (6.8～14.3%) とされることから切除標本の全剖面での注意深い検索が必要と考えられた。

2 胆嚢癌の肝浸潤様式の臨床病理学的検討

若井 俊文・白井 良夫・坂田 純
永橋 昌幸・金子 和弘・畠山 勝義
味岡洋一*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野
同 分子・診断病理学分野*

【目的】胆嚢癌の肝浸潤様式を検討し，その予後判定における意義を解明する。

【方法】根治切除が施行された胆嚢癌 162 症例のうち，組織学的肝内直接浸潤 (pHinf1b 以上) を認めた 40 症例を対象とした。リンパ管内皮マーカー (D2-40 モノクローナル抗体)，血管内皮マーカー (CD34 モノクローナル抗体) を用いた免疫組織化学染色を行い，グリソン鞘内進展の癌先進部の肝浸潤様式を検討した。

【結果】24 例にグリソン鞘内進展を認め，うちリンパ管浸潤陽性は 24 例，静脈浸潤陽性は 2 例であった。9 例に転移結節を認め，7 例は肝内直接浸潤単独であった。グリソン鞘内進展を認めた 24 例における肝内直接浸潤の深さとグリソン鞘内進展部までの距離に有意な相関関係を認めた (correlation coefficient $[r] = 0.52361$; $P = 0.0086$; formula, $y = 1.972 + 0.137x$)。肝浸潤様式 ($P < 0.001$) および癌遺残の有無 ($P < 0.001$) が独立した予後規定因子であった。肝切除術式は予後に影響を与えていなかった ($P = 0.9033$)。転移結節を認めた 9 例は術後 11 か月以内に原病死した。

【結論】胆嚢癌の肝浸潤様式はグリソン鞘内進展が主体であり，その組織学的進展様式はリンパ行性進展が主体である。グリソン鞘内進展と肝内直接浸潤の深さととの回帰式は適切な肝切除マージンを決定する際に有用である。